

緑爽会会報 No. 178

2022年2月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

1月山行報告「八十八大師巡り、その2結願」

コロナに翻弄されて何度も延期になった山行計画であったが、10月以降の行事が開催されるようになり、その流れで“初詣”山行として実施できたことは幸いであった。とはいえ、まさかの前日の降雪で、参加申し込みしていながら見合わせた会員もいたので、12名の参加となった。

今回は目的が初詣あるいは結願にあり、体調に合わせてケーブル利用でも参加できる形とした。ケーブルやロープウェイのある山においては、こうした形での会山行を取り入れても良いのではないかと思ったことであった。

実施日：1月7日（金） 参加者：下の写真参照

前回参加の会員は、金比羅台にある76番から87番までの12基のお大師さんを巡拝することが主目的である。雪は止んだが、高尾駅に来る途上にはクレバスとは言わないまでも、滑りやすい歩道などが潜んでいて、肩が凝るような思いの方もあったことと思う。全員が集合して中央線沿いの住宅街を進む。凍っている所もあるので気が抜けない。落合の交差点で右折し、登山口の「ろく

ざん亭」まで進む。登り始めは両側の笹に雪が積もって、この先どうなるのだろうかと不安もよぎるが、ひと登りして体温調整で厚手のものを脱ぐと、徐々に積雪は減っていき、何で？という感じになってくる。とうとう登山道が乾いてきた。肩透かしをくらった感じ



（左から）島田稔、荒井正人、辻橋明子、横関邦子、渡邊貞信（標識右側）
で、金比羅台に着き、夏原寿一、富澤克禮、竹中彰、石塚嘉一（前列）鳥橋祥子、有岡純子、小林敏博

まずは筑波山やスカイツリーなどの眺望を楽しむ。ここは、まとまったお大師像が1号路に向かって散在している。竹中さんはそれぞれをカメラに収めていた。これで薬王院に行って巡拝証を頂く資格を得たことになる。

ケーブル駅には3人が待っているはずだが、その手前の1号路の登りは急で、日陰に雪があつて怖いくらいである。左にリフト乗り場を分ければ傾斜が緩みケーブル山上駅だ。すでに到着していた3人と合流して参道を進み薬王院で巡拝証をいただく。御朱印を書くように、さらさらと達筆で書いてくれる。何だか御利益がありそうである。(実は、私は下見の時にすでにいただいていたが、個人名は書かれていなかった。どうも200円払わなかったことが原因のようだ。この時に別途購入していた巡拝証には蛇滝の印を押してもらっていたので、後日琵琶滝から登って、いただてきた。それが右の写真である=左は巡拝案内図・右が巡拝証)

薬王院に至る参道には杉苗寄進のコーナーの次に、健康登山で百冊を達成した方の名前が掲げられている。1冊とは21回登山で満行というそうだから、百冊と言えば2100回である。富士山をはじめとして、あちこちの小さな山でも千回、五千回とか修行の如く登る方がいる。高尾山はあくまでも健康登山であるが、それにしても大変なことである。御朱印をいただく建物の壁には99冊までの方々の名札が掲げられているが、この49冊のところ富澤代表の名札が掲げられていた。千回を超えていることは素晴らしいことだ。その反対側には樹齢数百年の杉が石の道標を包み込んでしまった



「不思議なめざめ石」があると代表から説明を受け、それに見入る。参道の杉の大木の大きさからすれば、確かにこのくらいの大きさを呑み込んでしまうことは察せられるが、それが発見されたことも驚きである。植生が豊かなことは勿論だが、こうした珍しい場所やパワースポットが散在することが高尾山の人気の秘密なのだろう。

参道の階段を登って目的である初詣を済ませ、更に上部にある幾つかの八十八大師を辿って山頂に達した。風も無く、南アルプスの一角も見える良い天気の中、記念写真を撮った後、東屋のテーブルと、その下に敷いたシートで昼食とした。年始の山行での恒例となった甘酒が美味しい。

今朝の心配をよそに下山にかかる。帰宅するまでが山歩きであると自らに言い聞かせるのは、左足首の捻挫慢性化で踏ん張りが利かないのと、それをかばっているうちに右膝が痛くなって、ちょっとした傾斜でも痛くて、横歩きになってしまう私が一番心配だからだ。土の部分はまだ良いが、舗装道路の雪の残った所は怖くて後傾となり、却って危ない。変なところに力が入るため疲れる。

薬王院までは富士道を取り、後は1号路に行く。途中、代表からアサギマダラの食草である鬼女蘭(キジョラン)を教えていただいた。この種子は白い綿毛で風に運ばれていくが、同様の定家葛(テイカカズラ)の種子ともどもビンに入れたものをお持ちで、見せていただいた。またもう少しでケーブル組と合流という頃に、小林さんが救急救命士の講習を受けた1週間後に、それを役立てる場面に遭遇したことを話してくれた。無事に下山し、留守番会員の藤下さんに電話する。

山道を歩きながら、こうした山にまつわる事象が話題となり、様々な話が出来るのが山歩きの楽しさであると痛感する。コロナで直接会う機会が制限される中、オミクロン株が猛烈な勢いを増す前に、こうして山を歩いて、下山後もいろいろ話が出来た事は幸運であった。

(報告：荒井正人 集合写真提供：石塚嘉一)

初詣山行に参加して

有岡 純子

2020年12月に入会して以来、コロナ禍によって山行が中止になり、なかなか参加が叶わずにいました。今回も、前日に南岸低気圧の影響で東京など南関東に雪が降り、どうなることかと思いましたが、富澤さんから「決行」のご連絡があり、念願の初参加となりました。

朝、新宿に向かう途中、積雪のためか高田馬場付近で電車が止まってしまい、9時の高尾駅集合に間に合わないかと思いましたが、1本前で向かっていたため何とか9時ちょうどに到着しました。初参加で遅刻のイメージがつくのは回避できてほっとしました。

高尾駅北口からスタートしたところ、歩道にはまだ雪が残っていて、滑らないように慎重に歩きました。登山口から登りに入ると、登っていくうちに足元の雪がだんだん減っていき、尾根に入ると



と無雪期の登山道と同様になっていました。雪は木に積もり、地面まで届かないのだろうと思いました。しかし油断していると上から雨のように溶けた雪が降ってきて、服が濡れてしまいました。このとき鳥橋さんが傘をさしていたので、さすが！と思いました。

金比羅台に着くと東側に眺望が開け、新宿や武蔵小杉、遠くは相模湾まで見えて、しばし景色を堪能しました。ここに八十八大師のいくつかがあり、番号を確認しました。

実は一度、数年前に高尾八十八大師を一日で廻ったことがあるのですが、結構大変でした。最後にピアマウントに行ったのは覚えているのですが、途中の大師様のことはあまり覚えていなかったもので、今回も新鮮な気持ちで歩くことができました。

ケーブル駅で合流して全員で歩き始めました。途中に「三密の道」という門がありました。コロナ禍でよく耳にするようになった「3密」とは違うようです。これはもともと真言宗の教えにある言葉ということです。「身密」（正しい行い）、「口密」（正しい言葉）、「意密」（正しい心）を心がけるための修行を指すということです。本来の言葉の前に、コロナで流行った言葉を先に覚えてしまって少し恥ずかしくなりました。

薬王院では、八十八大師すべて回った方の巡拝証の発行手続きをして、その間に私は健康登山のスタンプを押していただきました。まだ一冊目の二回目、道のりは遠いです…。

山頂そばの「いつもの場所」にて大休止となりました。晴れて日差しは暖かかったですが、温度計は5℃を指していました。幹事方から温かい甘酒をふるまっていただき、体が温まりました。夏原さんからショウガをいただいて、甘酒に入れるとさらに美味しくなりました。富澤さんからは手作りの「木瓜酒」をいただきました。初めての味でした。

それぞれのルートで高尾山口駅に下山後、有志で高尾駅まで移動し、総勢9名で新年会となりました。場所は南口のグルメシティ内の「レストラン多花美」でした。一升瓶1本を頼んで、楽しい宴となりました。「まん延防止」発令前でぎりぎりセーフでした。

これからも緑爽会の皆様との山行&宴会に参加するのを楽しみにしております。

1 2月講演会報告・続編

<前号で横山さんが深田宅に伺った折に、諏訪多栄蔵さんが来られていた時のお話がありました。今号では、この後の横山さんのお話をお伝えします>

諏訪多栄蔵さんはヒマラヤの山座同定について詳しい方で、当時私は東京から見える山の山座同定について書いていたので、いろいろ教えていただきました。この諏訪多栄蔵さんと、深田久弥、望月達夫、吉沢一郎の四人がヒマラヤ研究の四天王と言われています。

実は、深田さんは随分前からヒマラヤの先に、中央アジア・シルクロードに目を向けていらっしやいました。1954（昭和29）年の手紙に「私の夢は中央アジアの山岳地帯に精通して、一空想人物の大旅行記を書くことです」とあります。（編集注：深田久弥はこの後、1958年にはヒマラヤへ、1966年以降は3回シルクロードに行っている）ヒマラヤや中央アジアに関して集めた蔵書は大変貴重なもので、亡くなった後に国会図書館に収められました。その目録があり、そこに望月達夫さんは、こう書かれています。深田久弥のこれらの書籍は「世界的にも有名な蔵書だった」と。これを数えてみると約1200冊あります。

カメラを持ってものを見ていると、ものがまっとうに見られなくなると書いているくらいカメラ嫌いのはずの深田さんでしたが、1966年1月からシルクロードへ行かれる時に、高級機種のカメラをお貸ししました。帰国後、お宅におじゃました時に、撮ってきたスライドを見せるとおっしゃいました。プロジェクターが畳の上ではうまく壁に投影出来ないで、志げ子夫人に、奥の部屋の豆炭炬燵を台にするから持ってくるようにと伝えましたが、なかなかおいでにならないのです。業を煮やした深田さんが聞くと、「その上には、おばあさんのお骨が載っています」と言われたので思わず笑ってしまいました。志げ子夫人が「横山さんにお借りしたカメラをお返ししなくてはいけませんよ」と話されたその時にも、むにやむにやと絶妙なお顔をされたのを覚えています。亡くなった翌年、志げ子夫人から茅ヶ岳に登るということでご招待をいただいた。最後の宿「能見荘」に泊まって、志げ子夫人とご家族や山村正光さん、近藤信行さんらと一緒にでしたが、その時ご長男の森太郎さんがカメラを首から下げているんです。今更それは僕のカメラ、返してとも言えず結局そのままになってしまいました。

志げ子夫人のことです。多くの方が志げ子さんについてはその経歴や深田さんとの出会いなど、ご承知かと思いますが、決断が早く、でも細やかな気遣いの出来るチャキチャキの江戸っ子でした。（深田さんは江戸っ子など鼻持ちならないと書いていますが）深田さんが亡き後、お宅を訪ねた折に、陽当たりの良い縁側でお話したことで印象にあること。庭に池を作ったのですが、そんなブルジョア趣味など言っていたのに、水を張ってからはオタマジャクシが泳いでいて、それを原稿も書かず半日も眺めているんですよ、とおっしゃるのです。

それと志げ子夫人の文章力にもビックリしました。『私の小谷温泉』の中に「山に逝った夫 深田久弥のこころざし」という文章があります。これは『婦人公論』1971年6月号とありますから、月刊誌の発行から考えれば、亡くなって間もなくが締切だったのではないのでしょうか。でも長文の良い文章を書かれています。

つい最近の『山岳』116年に雁部貞夫さんが「深田久弥没後50年 果敢に人生を歩む」として書かれています。この「果敢」という言葉は、ピッタリだと思います。そして深田さんのことでもう一つ。深田さんはストーリー・テラーとして優れていたと思います。いつでしたか、深田さん

から電話をいただき「山の切手を集めているそうだが、キナバルのはあるかね？」と聞かれました。ありますと答えると明日持ってきて欲しいというのです。翌朝早くお持ちしましたら、奥様がおっしゃるには、『世界百名山』のキナバルの原稿を午後取りに来るというのに、まだ1行も書いていないんです、とのこと。それでも『岳人』の連載にはうまく書いてある。『日本百名山』は、こう言うては失礼ですが、ご自分が登った山の紀行文にちょいちょいと書き足せばいいわけですが、「世界百名山」ではたった一つ、富士山しか登ってないのですからね。でも、こうして様々な文章を読んで、それをまとめるという点では独壇場ともいえる才能があったと思います。

「山の文化館だより」から

深田久弥は現在の石川県加賀市大聖寺で生まれた。生誕の地である大聖寺には「深田久弥 山の文化館」があり、そこに事務局を置く「NPO 法人 深田久弥と山の文化を愛する会」という会があります。私も会員の一人で、季刊の「山の文化館だより」や毎月開かれる「聞こう会」の内容がまとめられたニュースが送られてくるのを、いつも楽しみにしています。

先日届いた冬号には、12月4日に開催した講演会に出席いただいた文化館の大幡事務長が一文を寄せておられたので、許可を得てここに転載させていただくこととしました。(荒井正人)

喫茶「穂高」再訪

大幡 裕

東京御茶ノ水駅聖橋口近くに「穂高」という喫茶店がある。数年前のことになるが、日本山岳会会員で画家の中村好至恵さんの絵が、店内に展示してあるとの話を聞いて訪れたことがある。店内を見回しても中村さんの絵はなかった。展示の期間が過ぎていたのかもしれない。

たまたま空いている席に座ったのだが、テーブルの横の壁を見ると、穂高岳を描いた油絵がひっそりと掛かっていた。署名に目をやると、なんと y. yamakawa とある。そして、なんとなく見覚えのある書体でもある。こんな所で山川勇一郎さんの絵に出会えるなんて嬉しくなった。出がけにお店の方に確かめると間違いなく山川さんの作品であった。その上喫茶店の名前の「穂高」は、山川さんのこの絵に因んで付けられたとの事であった。このお店のシンボリック作品だったのである。



喫茶店「穂高」

先日、山岳会の会合で東京に出向くことになり、空き時間に訪ねたい所が二つあった。一つは、深田久弥の著作の装幀をしていた谷口喜作の菓子舗「うさぎや」であり、もう一つは喫茶「穂高」であった。店内に入ると、あいにく穂高の絵の横の席は空いていなかった。絵に目をやりつつ他の席に着いた。コーヒーを飲んで帰るころには、その席が空いていたので近くで見ることが出来た。山川さんの絵に再会できたことを喜びながら店を後にした。

山の文化館展示室には久弥さんと遠征したジュガール・ヒマールを描いた絵が掛けられている。また最近、吉野満彦宛で山川勇一郎手描きの絵葉書を入手した。これは神奈川近代文学館を経て頂いたもので、思わぬ出会いがまた一つ増えた。

(編集注：文中の「山岳会の会合」とは当講演会のことです)

今西錦司『千四百山のしおり』・『千五百山のしおり』

南川 金一

長年詰め込み放題だった本棚や、百年史編纂時以来放置したままだった紙屑の山に手をつけなければならない事態になり、それらを整理していると、“お宝”のようなものが出てきた。そのひとつは今西錦司(1902～1992)の『千四百山のしおり』と『千五百山のしおり』で、前者は今西錦司の1,400山登頂祝賀会で参会者に配られたものであり、後者は1,500山の時のものである。いずれもA5判60ページほどの冊子であり、背にタイトルがないから目につきににくく、他の本の中に挟まった状態で書棚に埋もれるようになってしまっていたのだった。



『千四百山のしおり』には1984年5月1日付けの織内さんからの手紙が挟まっていた。「今西錦司さんから一四〇〇山登頂のしおりを二冊送って来ましたので、ちょうどよい機会なので一冊を大兄に進呈します。…お祝いの会があったのですが小生は他の行事と重なったため行きませんでした」とある。「ちょうどよい機会」とは、その年の4月、私は織内さんの紹介で山岳会に入会したからである。1,400山の祝賀会は1984年4月に京都で開かれた。私は時を同じくして山岳会に入会したわけである。入会に際し、入会申込書の「山行経歴」欄に、それまでに登った300山ほどをすべて記入(記入欄が足りないので別紙に書いて添付)した。織内さんから見て、国内の数多くの山を登ろうとする私の山登りは、今西錦司の登り方と似ているので、興味があるだろうと『千四百山のしおり』を送ってくれたのだと思う。嬉しかった。

それから2年後の1986年4月、今西錦司の1,500山登頂祝賀会が開催されることになり、織内さんも出席すると聞いたので、「しおり」を1部余分に貰ってきてほしいとお願いした。それが『千五百山のしおり』である。織内さんは今西会長の時の副会長であったから案内状が届いたが、祝賀会には今西錦司が山に登るのをサポートした人たちが全国から京都へ駆け付けて祝意を表したというから、今西錦司は幸せであったし、サポートした今西ファンも幸せだった。

「しおり」は、山名・三角点の等級・標高・登頂年月日を1行に整理して、20万図ごと(関西は数が多いので5万図ごと)に、登った順に列記してある。『千五百山のしおり』では、北海道70、東北86、越後会津51、関東周辺138、東海76、中部山岳地帯166、美濃北陸123、京都周辺294、紀伊半島140、中国地方149、四国90、九州125、合計1,508(1985年12月30日現在)の山が載っている。『増補版・今西錦司全集』別巻の「登頂1552山 山名リスト」は、『千五百山のしおり』掲載の山に、その後登った44山を加えてある。

『千五百山のしおり』に新聞の切り抜きが挟まっていた(次ページの図版)。今西錦司の山登りの一端を窺うことができる。「1552山リスト」では三巢子岳は1986年5月3日。今西錦司の山頂での儀式は有名で、今西ファンはその儀式に参列できた榮譽を喜んだ。また、『折々の山』と『続 静かなる山』(いずれも茗溪堂)には、望月さんが今西錦司の池口岳登山に同行した折の話が載っている。南アルプス南部にある池口岳はアプローチが不便、かつ登りがいいのある山なので、今西錦司のために静岡支部の牧野衛・水野公男両氏がお膳立てをし、今西会長の時に副会長だった望月さんに

も声を掛けたのであろう。上部でテント泊の計画で出発したが、雨で退却。翌日、登山口の遠山宅から1日で往復すべく、4時に出発。最高地点の北峰着 12 時半。池口岳にはピークが2つあり、手前の北峰は 2392 ㍎、奥の南峰に三角点があって 2375.6 ㍎。しかしその間は 100 ㍎ほど下って登り返さなければならないから、壮者といえども南峰まで行くのはきつい。北峰からの下りは途中で暗くなり、「今西さんは眼がわるいから…、二人

人が灯りをつけて足許を照し、二人がそばにつき、…。遠山家に帰着したのは九時四十五分で、十八時間近い登降となった。それにしても今西さんの強いことを改めて思い知らされた…」。「酒の弱い私は早やばやと食事を終って寝床に入った。それでも十一時は廻っていたろう。今西さんは、登れたことが嬉しかったとみえて、ゆっくり呑んだというから、余程おそくなったようだ」。『千五百山のしおり』によると、池口岳は 1979 年 8 月 19 日。今西錦司は 77 歳だった。

登った山が 1,552 というのは大変な数である。私が入会したころの長老の話では、「生涯に 1,000 山登ることができれば相当なもの」だった。土曜日は出勤であり、祝・祭日も今日のように多くはなく、新幹線や特急のない時代であった。また、学生時代や若い時は旺盛に登っていても、社会へ出て世の中の歯車に組み込まれて、山登りから離れてしまう人が多いのが現実であった。『山岳』第 88 年 (1993) 掲載の追悼文の略歴では、今西錦司は国内の山を 1968 年 500 座、1978 年 1,000 座、そして 1985 年 1,500 座登頂を果たした。若いころは探検的登山に情熱を傾けながら、なおかつ国内の山にも目を向け、1 つでも多くの頂上を踏みたいと晩年まで執念を燃やし続けた人は珍しい。日本山岳会で長老と目されてきた人であっても、そんな人はほとんどいない。

私は今西錦司を見かけたのは、1985 年 8 月 24 日、椿山荘で開かれた創立 80 周年記念式典の折だった。新聞の写真に写っているのと同じものであろう、長さ 170 ㍎ほどの細い棒を杖として使いながら、しっかりとした足運びで会場に入ってきた。その時の、今西錦司という人の持つ空気感のようなものが今も私の脳裏に残っている。1,500 山登頂達成が見えてきたころであり、秘めた闘志のようなものが感じられた。

山岳会では 1980 年代後半ころまで『山日記』を発行していた。『山日記』の巻末に「日本の山」として、富士山剣ヶ峰から始まって、地形図から拾い出した 1,600 ㍎以上の山が網羅されていた。私は自分が登った山をそのリストでチェックするのを楽しみにしていた。意識はしなかったが、今西錦司の山登りの後追いのようなものである。そのうちに、そのリストにある 2,500 ㍎以上の 223 山のうち、未登の山が 30 ほどになった。2,500 ㍎以上の山をすべて登ったとか、それを目標にして登っている人がいるという話を耳にしたことはないのだから、それを追求してみようと思えるようになった。それが終わると、2,000 ㍎以上を…と考えるようになり、それとともに、私が涉獵する山頂は、今西錦司のそれとは趣を異にするようになっていた。今西錦司の山のリストへの関心が薄くなり、書棚を探すことをしなくなったので、冒頭に書いたごとくになっていたのである。

この稿を書きながら、私も今西錦司の 1,500 山ころの年齢に近づいていることに気が付いた。山に登ることができる人生の時間はあまり残っていないと悟るべき時のようだ。

人生の大きな出会い

蜂谷 緑

人生には忘れられない大きな出会いが幾つかあります。私にとって杉森久英先生に出会えたことがその一つで、私を育てて下さった温情あふれる師として、今も心の中に生き続けておられます。いつか私も、先生の没年齢を超える年齢になりました。過ぎし日の事が懐かしく甦ってまいります。

初めてお会いしたのは、昭和32年秋のこと。私どもが結婚のご挨拶に伺った時でした。赤堤に移られる前のこと。「文藝」編集長を辞めた先生が作家生活に入られた頃でした。松原の寺院の一隅に仮住まいされていました。伺うとすぐ酒盛りが始まり、夫の近藤信行とは同じ中央公論の先輩・後輩の仲、加えて私の従妹の連合いが、先生と同じ時期の同僚だった縁もあって、いつ果てるともなく話が弾んで、気がついたら夕暮れが迫っていました。「もう失礼しましょう」と言ったのが先生の耳に入り、「そんなことを言われては、酒がまずくなる」と叱られたのを思い出します。先生は文藝記者としてスタートしたばかりの夫にご自身の経験を惜しみなく話して下さいました。それはそのまま駆け出しの編集者の夫にとって血となり肉となったと思います。

私にとっても杉森先生は育ての親のような方でした。高校時代に高校演劇コンクールで受賞してから、芝居の世界に首を突っ込んでいた私でした。数本の戯曲を演劇雑誌に発表しましたが、結婚して子供が生れると、自由に外出することも出来ず、次第に筆をとることもなくなりました。そんな時、あるきっかけから「アルプ」という雑誌に散文を書く機会を与えられました。初めて書いたのが「常念の見える町」という作品で、私が戦争中に疎開していた安曇野・豊科町での思い出でした。



敗戦で陸軍士官学校から復員してきた兄が結核で死ぬまでの話でした。少年の頃から一途に軍人になることを志して、空しく逝った兄のことを妹の立場から追慕したものでした。まだ、戦争責任が激しく議論されていた時代のこと。陸軍というだけで論評を避ける向きもありました。その時、私を励まして下さったのが杉森先生と、もう一人は「アルプ」同人の山口耀久さんでした。

それから時代背景をバックにした山の文章を書き続けましたが、その度に先生は目を通して感想を寄せて下さいました。ただ、付け焼き刃で短歌や俳句を扱った時には「面白くなかった」と。よろず造詣の深い先生からすれば、笑止千万だったと思います。趣味として芸事を嗜まれ、長唄や習字の稽古をなさるお姿を見かけたこともありました。作家として忙しくなられてからは、当時まだ重たかったテープレコーダーを抱えて取材に東奔西走、多くの作品はまさに先生の汗の結晶でした。

パソコンに添付で原稿が送れるようになる以前は、作家と編集者との関係は、銀座のバアであったり街の寿司屋であったり、夜のお付き合いが多かったものです。その為に編集部は遅刻を容認されていました。その代わり、正月ともなればお年始まわりがありました。まず、杉森家でお屠蘇を頂いてから、夕方から始まる井上靖先生のお宅の新年会に向かいました。それ迄まめまめしく酒肴

を整えて下さっていた奥さまも、「5分待って下さいね」と、手早く訪問着に着替えて出て来られました。一人では帯も結べない私は、さすが加賀百万石・金沢の女性と感心したものです。

井上家では、氷壁御殿と呼ばれた邸宅の書斎と居間をつなげて、各社の記者・編集者が集まって無礼講の大騒ぎ。NHK 歌謡大賞の選考委員長・山本健吉先生がその年の受賞曲を上手に歌われると、続いて各社の方々も得意の喉を披露されました。芸事のお好きな杉森先生でしたが、どんち

ゃん騒ぎの場では井上先生と静かに盃を運んでおられました、下戸の私は、これという芸も無くて片隅に控えておりましたが、その席で接した作家の奥さま達には、教えられることが多々ありました。

井上先生の奥さまは泰然自若とした方でした。後に伺った話では中国旅行の際の歓迎会で、日本の歌を所望された時に、堂々と「水師營の会見」を歌ってのけたとか。戦前の文部省唱歌で、「旅順開城約なりて 敵の將軍ステッセル 乃木大将と会見の 所はいずこ水師營・・」という歌です。女学生の頃から慣れ親しんだ歌でしょうが、歌詞が解ったら会場はさぞ仰天したでしょう。夫君は当時、日中友好協会会長でしたから。

また、70年安保闘争のときには長男の修一さんを頼って来た東大の助手を邸内に匿われたこともあった由。「私だけが何も知らなかった」と、井上先生が苦笑して話されたのを覚えています。

山本健吉夫人は、まるで子どもをあやすように、酔っ払った先生のお世話をなさっておられた姿が目に見えます。

杉森夫妻のエピソードとして忘れられないのは、いつものように杉森邸でのお酒の折に、こんなことがありました。先生が『天才と狂人の間』で直木賞を受賞された後のことです。受賞が決まった時、先生はとても嬉しそうでした。短編『猿』が芥川賞候補になったのは一昔前でしたから「私が欲しかったのは直木賞だった」と、作家として認められた喜びを隠そうとはされませんでした。

盛大な受賞パーティーから何年か過ぎた頃でした。奥様が、「あの時、お前は後から来なさいと言われて遅れていったら、誰も案内してくれなくて困ってしまった」と漏らされたのです。「それはひどい。お困りでしたでしょう」と私が奥様の肩を持つと、途端に先生は不機嫌になられて「そんな恨みごとを今になって言うのか」と奥様を叱りつけたのです。夫婦並んで晴れの舞台上で賞状を受け、花束を抱える姿など、明治生まれの先生の「男の美学」にはなかったのでしょうか。奥様は素直に「ご免なさい」と言われました。

対照的に、思い出されるのは、同じ石川県出身の深田久弥夫妻のことです。北畠八穂さんとの離婚問題で叩かれた深田さんが、志げ子夫人共々金沢での長い疎開生活を切り上げて「作家」として再起すべく上京。松原に居を構えてからは、深田さんの集めたヒマラヤ資料を目的に若い岳人たちが足しげく通っておりました。私も夫と共によくお訪ねしたものです。志げ子夫人は本郷西片町の生まれで、お茶の水専攻科出の才媛、しかも弟の中村光夫氏の影響で大正デモクラシーの空気を吸って育った女性でしたから、夫婦の会話も杉森家とは大違い。その昔、一高に合格して

上京した深田青年の目からは、その女学生ぶりは、いかにも「東京の令嬢」に見えたのでしょう。歯切れよくご自分の考えをおっしゃりながら、テキパキと夫君の仕事を支え、山にも同行されて身の細々したことを一身に背負って、よく尽くしておられました。深田先生は、悠然と構えて、奥様の献身に甘えて暮らしておられたような気がします。

杉森先生亡きあと、お茶の先生をなさりながら一人静かに暮らしておられた奥さまも、ただ従順なだけでなく、しっかりのご自分の意思を持った聡明な方だったと今にして思います。

杉森先生を勝沼のわが家にお迎えした日、谷崎潤一郎先生の弟の谷崎終平氏がご一緒でした。谷崎潤一郎著『細雪』が完結、全集が出版されて全盛の時期でした。世間では「大谷崎」と呼んでいました。その作家活動の源となった松子夫人の存在も大きく取り上げられておりました。谷崎・荷風といえば、中央公論社の財産でしたから、近藤も以前から勉強していて、山梨に移住してからは、甲府のカルチャーセンターで「谷崎文学を読む会」という講座を主宰して、向学心のある多くの女性たちを集めておりました。終平氏を迎えて、地元のワインで酔わせた上で、ここぞと質問する近藤に「これ以上は言わないぞ」とばかり口を閉ざしておられました。それでも私には、谷崎作品の源泉とされる倚松庵の松子夫人よりも、少年時代に可愛がって貰った先妻の千代子夫人（佐藤春夫夫人）を慕っておられる方のように思いました。そんな終平氏と親しくされていた杉森先生に、権威に盲従することなく、人間の心の奥を汲みとる温かさを感じました。

座談の名手だった先生は、また講演もお上手でした。文学好きの甲府の女性たちの前で面白おかしく、ご自分のことを話されました。例えば、戦前に流行った「東京行進曲」から「恋の丸ビル、あの窓あたり、泣いて文書く人もいる」の一節を引きながら「あれは中央公論社のことです。丸ビルには〇〇鋳業とか××製作所とか、固い会社ばかりで、愛だの恋だのという軟弱な会社は中央公論社しかなかった」と言って、会場の中高年女性らを笑わせておられました。（ちなみに昭和40年刊『中央公論社の八十年』を開いてみると、なんと著者は杉森久英。「読める社史を」という当時の嶋中鵬二社長の意向で、旧社員でもある先生に白羽の矢が立ったのでしょう。読み始めると面白くて一気に読了しました。それによると西本願寺の「反省会雑誌」から始まった「中央公論」が丸ビルで業務を始めるのは大正12年の関東大震災直前。戦後の好景気で京橋の自社ビルに移転するのは昭和31年でした。今はどちらのビルもありません）

赤堤の杉森邸のお庭には、先生のお好きな薔薇が咲いていました。薔薇といっても大輪の豪華な花ではなく、薄黄色をした野薔薇のような可憐な花でした。

先生の晩年、長女の涼子さんは東京女子大教授のかたわら、永年研鑽されたバレエの素養を活かして舞踊評論家としてもご活躍しておられました。またご長男の覚さんは、商社のお仕事の関係でタイに駐在された時期がありました。先生は大晦日の紅白歌合戦を覚さんに送るために、テープに録音されたりして、普段は取材で忙しくしておられた先生も、暮から正月にかけては和服姿で家庭の人になりきっておられるように見えました。

平成9年1月、先生は亡くなりました。死の前日、入院先の病院から奥様に電話されて「いよいよと思うから明日は来て欲しい」と言われたと聞いております。なんとという精神力でしょう。まさに古武士のような最後と見えました。

先生が亡くなられた後、覚さんから勝沼の夫の仕事場に電話があつて、「最近、登山を始めたので、今度、寄らせてもらいます」とのことでした。それから間もない平成23年、北アルプス常念

岳で覚さんは遭難死されたのです。その年、5月連休の常念岳は猛吹雪だったそうです。蝶ヶ岳から頂上に登り、下山する途中だったとか。連れの登山経験豊かな友人が先に強風で飛ばされたのを、荷を置いて探しにおりたまま、凍死されたのでした。勝沼に寄ると言いながら、なぜ八ヶ岳や奥秩父でなかったのか。その山が杉森先生との機縁になった、私にとって思い出の山、常念岳であっただけに、先生に申し訳の立たない気持ちを未だに引き摺っております。

弔問のため、久々に赤堤の杉森邸に伺った時も、よく手入れされた薔薇のアーチがお庭を彩っていて、奥様はお年を召されても美しく、先生亡きあと茶室を作られて、本格的に茶道の師範をなさっておられました。その日は私共が伺うというので、涼子さんもお手伝いに来ておりましたが、普段は一人でお暮らしとのこと。過酷な運命を受け入れて、気丈に対応してくださいました。

その頃には、夫も私も杖にすがってようやく歩く、足萎えの老夫婦になっておりました。人生は夢のように過ぎたと思います。

でも、作品は遺ります。先頃も、『天皇の料理番』がテレビで放映されたのを、楽しく懐かしく見ることができました。一国の支配者から庶民まで、あらゆる階層の「人間」を描かれた先生の温かい眼差しを思い起こさずにはられませんでした。

(註) この原稿は、先生の死後、北陸のさる新聞社からの依頼で執筆しましたが、再校まで済ませた後、音沙汰なし。観光開発の時代を過ぎ、バブル崩壊で刊行されなかったものと推察します。もう時効だと思うので、修正のうえ、恩師への感謝をこめて投稿します。(本名 近藤 緑)

(編集注：写真は、近藤さんの撮られたもの、ご主人のアルバムから等を提供いただきました)

只見 YH スキーコーチから JAC 入会そして緑爽会へ (その1)

吉田 理一

2022年、私もいよいよ後期高齢者の仲間に入ることになった。JAC入会から44年、緑爽会も18年目を迎える。節目の年にあたり JAC や緑爽会に入会するに至った経緯を振り返って記録に留めておきたい。今ならまだ記憶を呼び起こすことも出来るし、過去の山行記録を繙いたり、インターネットで検索したりする事も可能である。

私の「山」は只見 YH との縁から始まった。国鉄只見線は福島県の磐越西線会津若松駅と新潟県上越線小出駅間の135kmを繋ぐ計画で戦前建設が始まった。しかし戦争のため建設工事は中断されたままになっていた。福島県側は只見駅まで、新潟県側は大白川駅までで折り返し運転だった。両駅の間には建設途中で放置された橋脚等が散見されていた。

只見線は戦後26年経た1971(昭和46)年8月全線が開通した。標高約760mの県境にある全長6359mの六十里越トンネルの中間地点に日本有数の豪雪地域を走るため地下に無人駅「田子倉駅」が開設された、冬期間は通過駅であった。この駅は利用客減少のため残念ながら2013(平成25)年3月廃止された。

20代の頃は給料も安く、いかに安い費用で山に行くかは重要なポイントだった。約50年前、新採用で就職した私の職場でマイカーを持っている人はわずか数名だった。「小出駅5:30発の会津若松行きの始発電車に乗って田子倉駅下車→只見尾根コース→浅草岳山頂着11:00。下山して田子倉駅発小出行き15:30に乗車、小出町の自宅着17:00」はまだマイカーを持たない頃の私の定番コースであった。小出駅から田子倉駅までの運賃片道190円。その後中高年登山者の増加や JAC 選定

「日本 300 名山」、田中澄江著「新花の百名山」に浅草岳がリストアップされてからはヒメサユリの咲く頃は全国からツアー登山者が訪れることになった。今振り返ると随分手軽に浅草岳に通うことが出来たと改めて地の利のありがたさを感じている。

浅草岳山頂付近は山名の通り湿原地帯となっていて池塘周辺にはヒメサユリやニッコウキスゲをはじめ高層湿原の植物が沢山あったが、その頃は花の名前など覚えることは全く考えなかった。定年退職後、尾瀬ガイド協会認定ガイドの試験受験のため高山植物の名前を研修したのは 65 才になってからである。

浅草岳只見尾根コースは一步が標高差 1m を稼ぐのではないと思われるほどの急登・ダイナミックなルートである。足下に只見川を田子倉ダムで堰き止められた田子倉湖があたかもダム湖上空からドローンで映し出された映像を見ているかのように広がり、只見川の水源地である尾瀬沼の畔に聳える燧ヶ岳の双耳峰が遙に望まれる素晴らしいコースであるが、2016 年 10 月変形性膝関節症を発症し、私はもうこのコースは登れない。

現在は関越高速自動車道小出 IC 近くの大力山(504m)に、我家から 3.8km、標高 140m の登山口までの標高差 40m をリハビリ・トレーニングを兼ねて自転車で通っている。

浅草岳には福島県側からもう一本「入叶津登山道」がある。戊辰戦争で負傷した長岡藩家老「河合継之助」が担架に乗せられて会津に落ち延びた歴史のある八十里越峠の街道にある。司馬遼太郎の歴史小説「峠」の舞台となった所でもある。

入叶津コースはマイカー利用でないと手軽には行けない登山口である。1974 年 11 月只見線只見駅から徒歩 15 分の所に定員 46 名の只見 YH が開所した。YH 新聞に行事案内が載り 1975 年 8 月浅草岳登山・入叶津登山口コースに参加した。参加者は私の他には石川県からの女性一人で、他の宿泊者はいなかった。支配人夫妻と参加者二人の四人で大いに飲んで語った。47 年前のこの YH 企画の浅草岳登山参加がその後の私の山人生に決定的な影響を与えることになった。



1975 年 12 月只見 YH 支配人から電話があった。「スキー教室を始めるのでコーチに」との依頼だった。豪雪地帯の新潟県魚沼地方に生まれ育った私は子供のころから冬はスキー以外に遊ぶことが無かった。小中高と学校の冬の体育はスキー授業だった。1975 年の年末から毎年、年末年始は只見 YH で過ごすようになった。ボランティアとしてのスキーコーチであったが、お酒にリフト券付きで、屋根裏部屋での他のコーチとの電気炬燵に万年床と茶碗酒のスキーコーチ生活は楽しい青春時代の思い出である。

只見 YH には海外遠征登山と思われる写真パネルが何枚か掲げられていた。住込みでスキーコーチをしていて支配人ご夫妻の話を伺っているうちに色々なことが分かって来た。ご夫妻はかつて尾瀬長蔵小屋の従業員で越冬隊員として働いていたこと。奥様は「はるかな尾瀬」(朝日新聞前橋支局編 実業之日本社 1975 年刊)で穴田雪江(旧姓奥川)さんらと「長蔵小屋山女三羽鳥」のお一人として取り上げられていた方であること。日本山岳会会員番号 5650 番の斎藤多美子(三浦)さんで、1966 年坂倉登喜子会長のエーデルワイス隊に参加し、ペルーアンデスのカウラヤフ・プラカンヤに遠征した女性だけの海外遠征登山隊の一員だった。奥様に JAC の入会紹介者になっていただいて 1978(昭和 53)年 5 月 JAC に入会した(会員番号 8428 番)。私が JAC に入会したのは他の会員から勧められた訳ではない。そのことは次号で書きたいと思う。

「わが愛する山々」所収の『御座山』

小原 茂延

「深田先生、どうした。日向大谷で待つ」これは深田久弥著「わが愛する山々」（初版 昭和 36 年新潮社）所載の一篇『御座山』の冒頭に出てくる一節である。昭和 34 年 10 月秩父から南佐久への山旅の折に深田久弥が仲間との山行である集合場所の池袋駅で社線を間違えて、後を追いつく駅の「伝言板」で見つけた同行者からのメッセージである。同行者は不二さんこと藤島敏男と茂知さんこと望月達夫さんであることはご存知の方も多いと思う。メッセージを残したのは深田より 7 歳年長の藤島敏男で、氏とは昭和 14 年頃に蔵王、五色のスキーで会って以来のことのようであるが、深田が世田谷区松原に移住しルームに顔を出すようになって親交が深まり、藤島の唱える避衆登山の仲間となったようだ。



新潮文庫（昭和 46 年版）

この紀行文は半世紀近く前、当時の任地であった弘前で新潮文庫版を読んだが、御座山を「おぐらさん」と読むことさえ知らなかった。現役を終えた平成 12 年に埼玉川口に居を移して甲信の山に再び登りだした頃、北八ヶ岳に行った帰途に初めて南佐久の寂峰である御座山を目にしたのだった。

ところで、深田のパーティが御座山へのルートとしたのが秩父の駅からバスで納宮に至り、峠越えをして日向大谷の社務所で 1 泊、先ずは両神山に登り、埼玉・群馬県境を行き来して峠を幾つも越えて 2、3 泊、信州境のブドウ峠から下新井の集落に 4 泊目をした翌朝、目指す御座山に登頂する日程となったとあるから、まことに山旅というに相応しい。藤島に言わせれば夜行日帰りなどもの他の他と断じているが、当時は（現在にしても）大方の登山者にとって旧盆や正月・5 月連休以外は土日・祝日しか山を楽しむことが出来なかったのが実情である。深田ですら紀行文に今日は新嘗祭とか、秋季皇霊祭にあたりなど祝日を利用しての山行だったのがわかる描写が多い。

そんな訳で小生が両神山や御座山に登ったのも別々であった。5 月中旬に日向大谷から清滝コースを行き、山頂の岩間にアカヤシオが見事に咲くのを目にして、よい時期を選んだと思った。一方の御座山もその翌年に最短コースの栗生側から名残の石楠花を愛でながら森林と岩場の佳き山を踏み、八ヶ岳他の大展望を恣にした。

最近になって、『御座山』を再読して、深田一行のルートを 20 万分の 1 地勢図に辿って見たが、実にユニークというか凝った計画だと今更ながら感じ入った。この計画は三人の中で一番年少の望月達夫の立てたものだったという。彼もこの時の紀行文を『ブドウ峠』（「遠い山 近い山」所収）として書いている。御座山のことを大島亮吉が古い「山岳」の雑録に小倉山としてすでに紹介していたのを最近になって知った。それによれば「・・・小倉山（ヲグラサン）は又北相木村にては御座山（ゴザサン）と称し、頂上に御座山神社及び御岳山神社を祭る・・・」とあり、若くして穂高に逝った大島の石狩岳や谷川岳などと共に幅広い山行を知ることともなった。

なお、深田久弥の『御座山』の初出は「小説新潮」である。やはり作家としての面目躍如というか、単なる登山紀行文家ではない文士の気概が作品の底流にあるように思われる。

クラシック音楽好き

夏原 寿一

会員同士が顔を合わせる機会といえば山行や例会だが、それ以外に、隔月の会報発送のときに幹事が集まり、作業の後に居酒屋で語らうのも楽しみのひとつだ。原稿の校正から発送まで、荒井さんと小林さんを中心に皆で携わってきた会報を投函した後の安堵感に浸りながら一杯やるときの話題はいろいろだが、クラシック音楽の話題がわりとよく出る。それは、毎回お手伝いくださっている鳥橋さんをはじめ、担当の皆さんがクラシック音楽好きだからだ。

富澤さんが「明日、ピアノリサイタルを聴きに行く」とチラシを見せてくれたことがあるし、渡邊貞信さんはNHK交響楽団の定期会員（会報 No.173 4 ページ）、荒井さんは「姉に教わってベートーベンの『月光』の第1、第2楽章まで昔は弾けた」、小林さんは「高校時代、雨で停滞した木曾御岳の誰もいない山小屋で、ラジオで聴いたカール・ベーム指揮のモーツァルトの交響曲第25番に聴きほれた」。

そこで、私の知る範囲内でのクラシック音楽好きの会員を紹介してみた。クラシック音楽好きだと分かったそのキッカケも面白い。

◆関塚貞亨さん

関塚さんと喫茶店でコーヒーを飲みながら歓談することがある。関塚さんは、古参会員の武勇伝とか百年史の裏話などを聞かせてくださるが、山のこと以外にも絵画やウイスキー、レトロなカメラなどなど話題は多彩だ。そして、クラシック音楽についても話しが弾む。

「戦時中、私が船舶特攻隊として鹿児島に配属されているときにストコフスキー指揮の『田園』を聴いたんだよ。よかったねえ。そのレコードは小隊長が広島で探してきたもので、ビクターの赤盤(*)と言われたSP盤の6枚組。片面5分ぐらいだから6枚組になっちゃうんだよね。他にも、ブルーノ・ワルターとコロンビア交響楽団の『未完成』、これはコロンビアレコードの3枚組。カザルスの『トロイメライ』もあった。これもいい演奏だったね」

気の休まるときもない戦争のさなか、好きなクラシック音楽は何よりの癒しだったのだと思う。

「ストコフスキーが音楽を担当したディズニーの映画『ファンタジア』はバッハの『トッカータとフーガ』で始まっていて、続いての『田園』もよかったけど随分短くなっていた」とか「映画『オーケストラの少女』はストコフスキーとフィラデルフィア交響楽団が出演していて、演奏しているところを映像で見られたのがよかった」など、こういう会話がいくらかでも続く。楽しい時間だ。

(*)赤盤：ビクターが出していたレーベルの赤いレコード「名演奏家シリーズ」の通称。

◆渡部温子さん

10年ほど前のことだが、例会の始まる前の雑談中に、渡部さんの携帯電話から着信音の聞こえてきたことがあった。それは、メンデルスゾーンの交響曲第4番『イタリア』の冒頭部分だった。そこで渡部さんに「クラシック音楽がお好きなんですね」というと「好みは偏っているけど、好き」と。

一昨年のことだが、別の同好会の会合が銀座であったとき、帰りがけに渡部さんが「4丁目の山野楽器へCDを買いに行くんだけど行かない?」と誘って下さったので喜んでご一緒した。道すがら、「欲しいのは、ブラームスの交響曲の3番なんだけど、指揮は誰がいいのかなあ〜」とのことだったので、「私はブルーノ・ワルターのが好きです」といった。それで、1950年代後半にワルターが指揮したコロンビア交響楽団のものを求められたと記憶している。

◆鳥橋祥子さん

数年前、杉並区在住の友人と飲んでいるとき、彼が「杉並公会堂で年に3、4回、日本フィルハーモニー交響楽団の公開リハーサルがあるから行かないか。公会堂の前に並んで開場を待ってから入るんだけど、席は必ず座れるから。無料だし、予約もいらなし」と誘ってくれたので行くことにした。

当日、少し早めに出向いて行列に並びながらあたりを見回していると、そこに鳥橋さんの姿が！お互い「あれ?」、「どうも!」。それ以来、鳥橋さんは「今回は〇月〇日ですよ」と情報を下さっている。

昨秋、鳥橋さんから封書が届いた。開けてみると杉並区の広報紙の切り抜きが入っていて、それはコロナで休止していたリハーサルが12月に再開するというお知らせだった。このご時世、「入場にはQRコードからの申し込みが必要」とあるので、てこずりながらもスマホで申し込んだ。当日の演目はマーラーの交響曲で100人近い編成のオーケストラ。鳥橋さんの「生の音はやっぱりいいですね」に首肯。

◆中村好至恵さん

中村さんは、ご自身の作品の絵ハガキを作っている。それは、山や花の素敵な絵柄で気に入っている。それらの絵ハガキには、切手を貼る部分にも小さな絵が描いてある。絵は山靴とかコンパスなどで、ハガキを一層味わいあるものになっている。そのなかに「BACH」というタイトルの本を描いたハガキがあって、タイトルの下には小さな字で何やら書いてある。ルーペで見てもたらドイツ語なので、辞書を片手に読んでみると「フランス組曲」とある。「フランス組曲」といえばバッハの作曲した6曲からなるピアノ曲集だ。さらに、いちばん下には楽譜の出版大手の社名「ZENON」がある。

中村さんがこの楽譜を持っている、ということはピアノを弾く、と確信した私は中村さんにメールをした。するとYESの返信。そこには「すごく下手っピーで…、人前では弾けず、でも好きという類…」。加えて「バッハが好きだけど、ヘビメタ(ハードロック)も好き」とある。バッハとヘビメタとは面白い取り合わせだが、かく言う私もクラシックと共にジャズも好きで、年に2、3回は浅草にあるライブハウスにデキシードジャズを聴きに行っている。同じ感覚なのかなと思っている。

◆武田久吉

緑爽会の会員ではないが縁のある武田久吉もクラシック音楽が好きだったのでここに記そう。それを知ったのは2016年10月の緑爽会の講演会「武田久吉と歩いた尾瀬」(会報No.146)のとき、平野紀子さんから武田について「外出から戻ったら、服を脱ぐ前にレコードをかけてクラシックを聴いていたと祖父母から聞いていた」というお話があったからだ。

また、上記の会報に武田から穴田雪江さん宛てのハガキの写真があって、そこに「先日亡くなったコルトーの追悼の放送があって、彼の演奏3曲の放送もありました。わけても大公トリオの第1楽章はすばらしく、…」(*)と書かれている。穴田さんと武田とは、山のことだけではなくクラシック音楽のことも話題になっていたことがわかる。

(*)名ピアニスト、アルフレッド・コルトーによるベートーベン作曲のピアノ三重奏曲『大公』

♪ 山にはクラシック音楽好きが多い。ここに書かせていただいた方々以外にも、会話や文章の端々からクラシック音楽好きと思われる会員も何名かいる。

「山」で知り合った私たちが、山のことだけではなく、趣味とか特技のことなどでも会話を楽しむ、これぞサロンだと思っている。



+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ◆ + + + + +

二合半坂

小林 敏博

コロナ禍が長く続き、山行回数が減った代わりに散歩の回数が増えた。牛込台地の東端に住んでいるので、最近坂巡りをしている。坂には大概標柱があり、名前の由来等が記されている。

先日、靖国神社の梅の花を観に出かけたが、帰りにフィリピン大使館の横を東京大神宮へ向かう坂を下った。標柱には「二合半坂」と記されていた。この辺りの地名は千代田区富士見、靖国神社の北側には富士見坂があるので、富士山と関連があるのかと思ったが、坂の途中に建つ標柱には「この坂の上からは日光山の半分を眺めることができました。…この坂から見える日光山は富士山の約半分、すなわち五合の高さでした。五合の日光山のさらに半分で二合半坂と名付けられた」とある。江戸時代にも山好きの人がいて、山座同定を楽しんだのかもしれない。

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

3月山行：千駄ヶ谷富士と文京区内富士塚巡り

往時の姿を残す富士塚として都内最古といわれる千駄ヶ谷富士と文京区内の富士塚を巡ります。

日時：2022年3月18日（金） 集合：JR千駄ヶ谷駅改札口に10時 雨天中止

行程：千駄ヶ谷駅→千駄ヶ谷富士→千駄ヶ谷駅⇒（JR市ヶ谷駅で東京メトロ有楽町線に乗り換え）
⇒護国寺駅→音羽富士→小石川植物園（昼食）→白山富士→海蔵寺（食行身禄の供養所）→
駒込富士→駒込駅 歩行時間：休憩込み約5時間

※富士塚に登拝される方は、滑らない靴でご参加ください。

※費用：ご自宅から集合場所・解散場所からご自宅への交通費以外にJR市ヶ谷駅⇒東京メトロ
護国寺駅310円、小石川植物園入場料500円、計810円が必要です。

担当：小林敏博

申込：3月14日（月）までに小林へ



4月総会：4月16日（土）に予定していますが、コロナの状況により、ルーム使用が出来ないことも予測されます。その場合には、昨年のように書面での審議といたします。総会資料は、追ってメール・郵送でお送りいたしますので、議案書をご確認いただいた上で、メールで（郵送会員は同封するハガキで）審議結果と、近況をご記入の上、**4月15日必着**でお送りくださいますようお願いいたします。

5月山行：八重山（531m）～能岳（543m） 中央線「上野原駅」からバス利用

日時：5月17日（火）に予定しています。詳細は次号でご案内します。

※前号の「さがみこベリーガーデン見学とBBQ」の参加者に平野紀子さんが記載されていませんでした。ご都合で早く帰られたため集合写真に入っていませんでした。お詫び申し上げます。

―― 編集後記 ―――

初詣山行後、またも諸々制限を受けることになりました。寒くもあり、冬季オリンピックのテレビ観戦で過ごした方も多いいと思います。安心して春の山に行ける日を待ち望む昨今です。（荒井正人）

コロナ禍はなかなか収まる気配がなく、皆さんと一堂に会する機会を持ってないのが大変残念です。日頃の近況を「ようこそルームへ」にお気軽にご投稿ください。よろしくお願ひいたします。（小林敏博）

次号予告＜4月25日発行の主な内容＞ 皆様からの投稿をお待ちしています

2022年度総会報告、会員近況、その他寄稿投稿など